長崎聞役と中尾静摩

本会幹事　日宇孝良

長崎聞役とは江戸時代に長崎に設けられた西国諸藩と長崎奉行との連絡調整役である。長崎奉行との応対、異国船入港の際の備え、非常時への諸藩の対応の窓口となることが、主な任務だった。

長崎聞役は西国１４藩が設置し、長崎に派遣したが、そのうち福岡藩（浦五島町）、佐賀藩（大黒町）、熊本藩（大黒町）、対馬藩（東築町）、平戸藩（大黒町）、小倉藩（新町）の６藩は「定詰」あるいは「定居」と称して年間を通じて駐在した。

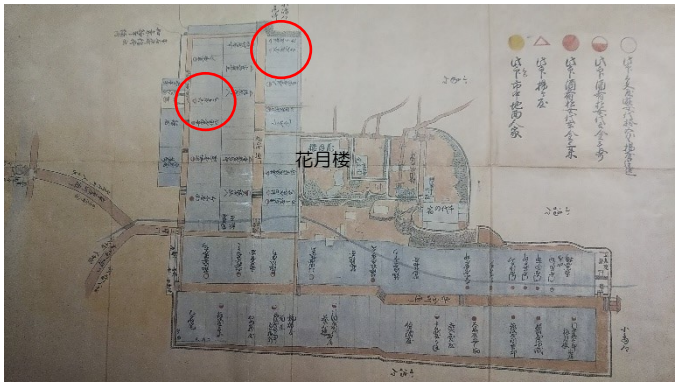
他の薩摩藩（西浜町）、長州藩（新町）、久留米藩（西浜町）、柳川藩（浦五島町）、島原藩（大黒町）、唐津藩（東中町）、大村藩（西中町）、五島藩（西浜町）の８藩は「夏詰」と称し、５月中旬から９月下旬まで駐在した。

※藩名の後の（　）は文化５年（１８０８）頃蔵屋敷があった場所を当時の町名で示した。

大村藩の蔵屋敷跡（現・中町教会付近）

長崎聞役が置かれることになったのは、鎖国下の長崎に正保４年（１６４７）ポルトガル船が来航したことがきっかけといわれる。聞役はそれぞれの藩の蔵屋敷を生活の拠点として活動していた。

西国１４藩の蔵屋敷に聞役が設置されたことによって、長崎奉行は諸藩に対する指示や触書を伝達する場合、長崎警備の当番の聞役を通して諸藩の聞役に伝えることが出来るようになった。例えばオランダ船が入港した時、奉行所からまず福岡と佐賀の聞役に伝達があり、次に島原・平戸・唐津・大村の聞役に、そしてその後にその他の藩の聞役へ伝達された。山本博文『長崎聞役日記』によると、諸藩の聞役の間では、定例の情報交換会が頻繁に行われていて、釜屋という丸山の茶屋がよく利用されていたという。しかしながら筆者が丸山町古図を調べたところ、２つの釜屋があり特定には至らなかった。



丸山町古図（○に釜屋の名前が見られる）
長崎歴史文化博物館蔵

中尾家住宅（県まちづくり景観資産・大村市玖島２丁目）

大村藩の聞役中尾静摩について紹介する。静摩は文政５年（１８２２）に生まれた。幼少のころ、大村純熙（すみひろ）の相手をつとめ、五教館、治振軒に学び、父と共に江戸にのぼった。その後、大村藩に帰り、五教館の舎長・祭師、訓導を務め、また脇備騎士としても仕えた。

安政４年（１８５７）から長崎聞役、元治元年（１８６４）には元締役等、藩の要職を勤めた。その後、玖島銀行の創設に参加し、明治３８年（１905）に没した。大村藩三十七士の一人として大村の護国神社に祀られている。

聞役時代の文久２年（１８６２）５月大村藩は静摩を長崎に特派し、密命により平戸藩と交渉、８月には江頭隼之助（家老江頭顕穎の長男）を平戸に派遣し、大村藩と平戸藩の同盟を成立させている。

「中尾静摩日録」には、静摩も丸山の釜屋を利用したとの記録がある。ただ、筆者中尾博一氏は、この時期の記事は欠落したものが多く、欠落は戦災によるものではないかと述べている。なお、物理学者の長岡半太郎は静摩の弟治三郎の子である。

明治２年（１８６９）３月、明治政府は、聞役に帰国を命じるよう長崎府に通達し、長崎聞役は制度としても終わりを迎えた。

本稿は令和５年１２月例会の発表の要旨である。

参考資料

山本博文『長崎聞役日記』ちくま新書　１９９９年
中尾博一「中尾静摩日録」大村史談会編『大村史談』第１３～２３号　１９７７年～１９８２年
大村市教育委員会編『大村市の文化財』１９９０年